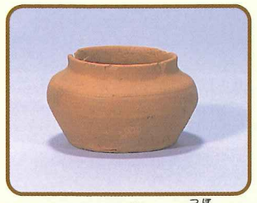
竪穴住居（8号住）から出土した土器。左から貯蔵用の甕（高さ33cm）、甕の下半部を再利用した鉢、小型甕、煮炊き用の長胴甕。



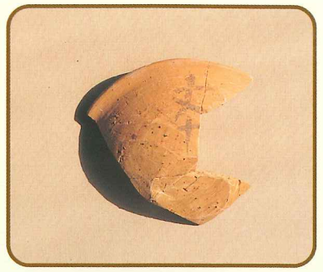
手のひらサイズの小型壺。神仏へのお供えに用いられた可能性があります。素焼きの器（土師器）で、ロクロ作りのため回転糸切り痕が残っています。

銅製の帯金具（バックル）。馬具、あるいは古代役人が身に付けた装身具。

土錘。芯に穴が開けられた土製品。残存長4cm。魚を採る網のおもりと考えられます。

窯で焼かれた硬い器（須恵器）。上は食器、下は貯蔵用。武蔵国の南多摩産と推定されます。

内面に煤が付着した灯明皿。



墨で文字が書かれた土器。
上から「本」・「基」・「上」

住居跡からアワ・ヒエ・ムギの粒が多数検出され、雑穀類が食用とされていたことが分かります。
左・中：アワ・ヒエ（約3mm大）
右：モモ（2.5cm大）

大間々遺跡発掘から分かること

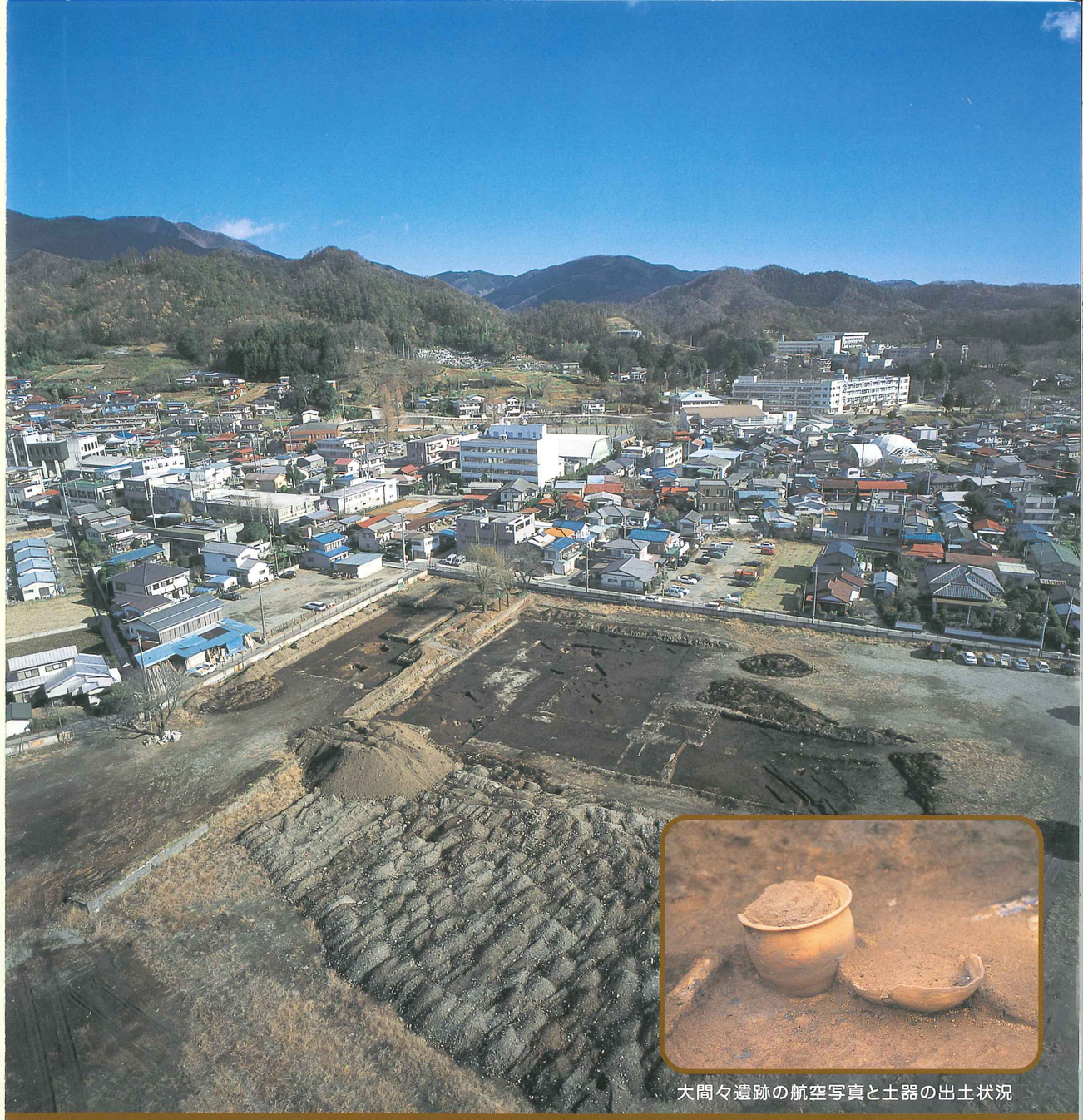
遺跡が見つかった上野原台地は、高燥で水が少ない土地柄のため、昔は人の住めない荒涼とした場所だったと思われていた方も多かったのではないでしょうか。しかし、大間々遺跡の発見によって、古代の上野原台地が想像以上に開発されていたことが明らかとなりました。

集落が栄えた奈良～平安時代は律令国家で、これまでの歴史研究では、上野原地域は甲斐国都留郡古郡郷に編入され、初期の郡役所が置かれた場所であった可能性も指摘されています。大間々遺跡が古郡郷の一角を占めるとともに、桂川流域の拠点集落であったことが想定されます。大間々遺跡の発掘調査は、上野原市や周辺地域の歴史を考えるうえで重要な発見といえます。

※本書では現在の市街地がある河岸段丘を上野原台地と呼んでいます。

古代甲斐国都留郡と郷の推定位置図

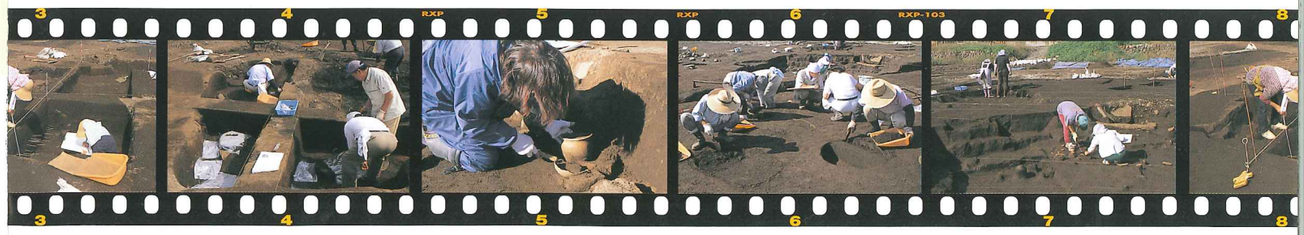
平成19年3月30日
編集・発行　上野原市教育委員会
〒409-0192　山梨県上野原市上野原3832
電話0554-62-3409　FAX0554-63-4772



大間々遺跡の航空写真と土器の出土状況

大間々遺跡の発掘調査

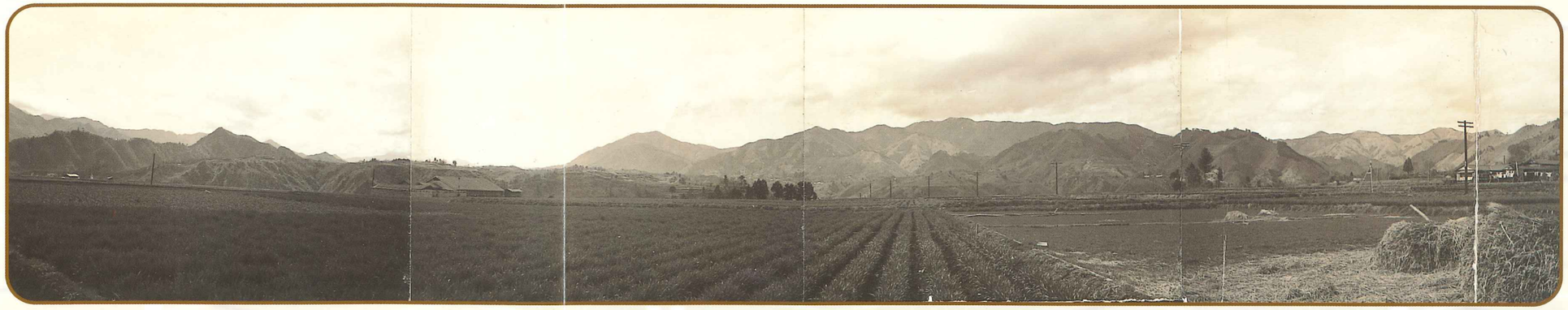
上野原台地に栄えた奈良・平安時代の集落跡



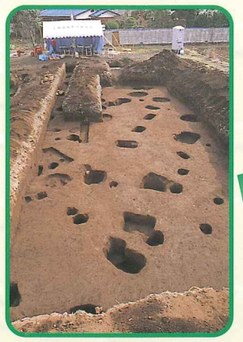
大間々遺跡

平成13年、現在の市役所建設時に発見されました。奈良時代～平安時代前期（8世紀～10世紀代）を中心とした集落跡で、竪穴住居13棟や掘立柱建物2棟以上などが広範囲に分布していました。竪穴住居の多くは北隅にカマドがあります。一辺5mを超える大型の竪穴と掘立柱建物は集落の中核的存在で、有力者の邸宅であった可能性があります。出土品は豊富で、土器（土師器・須恵器・灰釉陶器）、土錘、砥石、銅製の帯金具などがあります。

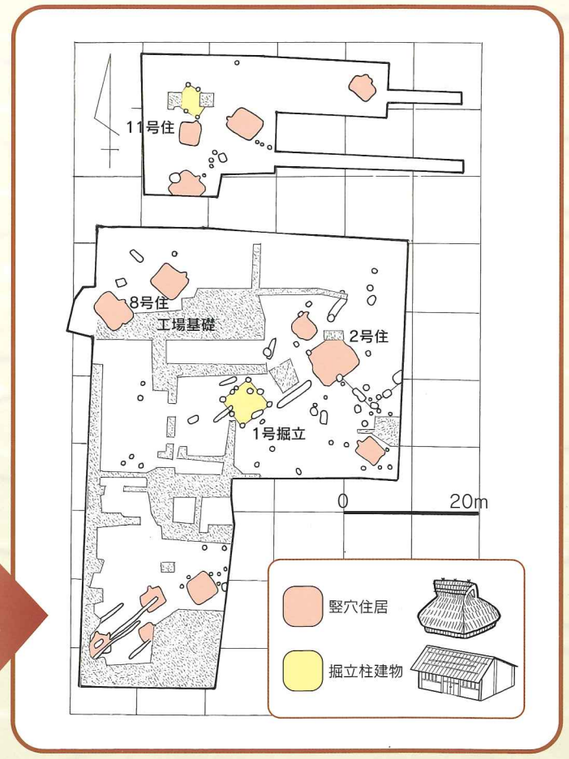
平成19年、市役所北側の病院建設時に、大間々遺跡の続きと思われる柱穴群が多数発見され、古代集落が大規模であったことが分かってきました。



大間々遺跡周辺の風景（旧役場より西方を望む）　昭和37年撮影

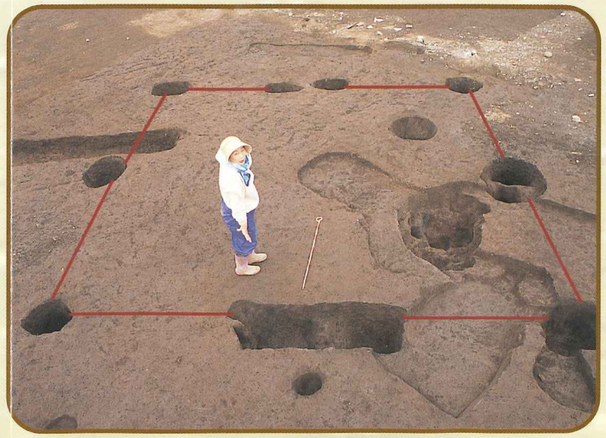


多数の柱穴群
奈良～平安初頭



大型の竪穴住居跡（2号住）　建て替えで拡張されていた。拡張後は一辺5.6mで、壁に沿って大きな柱穴（深さ1m）が等間隔で並び、中央に火を焚いた痕跡があった。平安前期。

深さ約1mの竪穴住居と石組みのカマド（11号住）　平安初頭。



大型の掘立柱建物跡（1号掘立）　隣接する住居（2号住）と共に遺跡内で最大規模。平安前期。

遺跡から出土した土器の破片